

NPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
研究紀要

niwa

瀬波



2015
第2号

NPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
研究紀要 第2号

niwa 瀬波



1. 西尾市詳細分布調査
2. 木曾街道ウォーキング
3. 朝日遺跡企画展示

平成 26 年度 活動記録

- 2 ニワ里自主事業
- 3 犬山街プロジェクト
- 4 青塚古墳史跡公園
- 5 西尾市詳細分布調査
- 6 朝日遺跡「まるまど貝塚の国」
- 7 その他 協働・委託事業
- 8 活動年表

研究論考

- 10 文化遺産「学」と NPO セクター
赤塚次郎
- 12 ある表象の作用
一岐阜県深橋前遺跡出土土器の分析から一
中谷正和
- 20 栗栖プロジェクト
一栗栖地区における文化遺産普及活動一
大塚友恵

コラム

- 24 震災遺構を残すということ
服部哲也

研究論考

- 26 瀬波里昆虫研究ノートその②
ある日の青塚昆虫観察日記
奥野絵美・兼松泰弘



平成 26 年度

活動記録

文化遺産の見えるまちづくり

地域が保有している多様な文化遺産を失われる前に発見・保護し、その意義を学問的に評価し、得られた成果を広く共有する。

そして地域が長い時間をかけて培ってきた文化の重要性を再発見する機会や交流の場を提供することにより、コミュニティがまちづくりの基盤として機能していく環境を整える。

ニワ里ねつとは、さまざまな取り組みを通じて「文化遺産の見えるまちづくり」事業を実現していきます。

ニワ里 自主事業

散策やワークショップ等、地域の文化遺産を活用した楽しい事業を展開。
「文化遺産カード事業」も平成22年度より継続して実施しています。



■ 栗栖プロジェクト『縄文時代の衣 アンギンを学ぼう』



■ 犬山たびモニターツアー



■ 歩こう！犬山木曽街道
～善師野から前原、朝日へ～

文化遺産カード事業

本年度、大垣市教育委員会の委託を受け、新たに8種類のカードが文化遺産カードの仲間になりました。これで文化遺産カードは合計110種類となりました。

散策・ワークショップ

6月に行われた『犬山たびモニターツアー』では、スマートフォンアプリを使い、栗栖周辺を散策しました。これまでにない散策のスタイルで、参加者の皆さんにも楽しんでいただけました。

また、「犬山市政60周年記念事業 ろくまるチャレンジ」の助成を受け、『歩こう！犬山木曽街道～善師野から前原、朝日へ』を開催しました。

栗栖プロジェクト

栗栖地区における文化遺産普及啓発事業。本年度は栗栖小学校で、縄文時代の衣を学ぶワークショップを開催しました。縄文時代に使われていた「アンギン」という布を製作し、縄文時代の生活の知恵を体感しました。

犬山街プロジェクト

文化遺産を活かした 地域活性化事業

平成24年度より行ってきた犬山街プロジェクトの集大成として、悉皆調査成果をまとめた『犬山たび』を刊行。



犬山たび案内人
犬山モモ次郎



歴史座of犬山街プロジェクト



いぬやま地域学芸員養成塾（犬山城下町内にて）

文化遺産総合パンフレット
『犬山たび』刊行

平成24年度より実施してきた犬山市内の悉皆調査の成果をまとめた『犬山たび』を編集・刊行しました。市内全7地区に眠る様々な文化遺産を紹介、魅力あふれる冊子となりました。今後市内各施設にも配布する予定です。

歴史座of犬山街プロジェクト

犬山の新たな魅力を紹介するシンポジウム『眠れる文化遺産から見えてくる 犬山、新・魅・力！〜3年間の街プロのキセキ〜』を開催しました。特別講演には金城学院大学の森勇一先生にご講演いただきました。第2部の二ワ里ねっと会員らによる劇場型セッションも大好評でした。

いぬやま地域学芸員養成塾

『いぬやま地域学芸員』を養成する講習会（全12講座）を開催し、熱心な受講生の皆さんとともに、犬山の文化遺産について学びました。本年度は受講生20名全員が修了いたしました。



犬山たび案内人
久久ギス丸

青塚古墳史跡公園

活用・管理業務

犬山市からの委託を受け、青塚古墳史跡公園の管理業務を行っています。美しい古墳を守るため、日々、美化活動・普及活動に努めています。



■ 瀬波史楽座



■ 青塚古墳を守る会



■ 校外学習の様子

青塚古墳史跡公園活用・管理業務
ニワ里ねっとでは、平成22年度から、犬山市より委託を受けて青塚古墳史跡公園の活用・管理業務を行っています。

本年度は、ガイダンス施設来館者数14,243名、学校見学数17校で、昨年度より多くの方にご見学いただきました。

青塚古墳でのイベント

ガイダンス施設企画展は、犬山街プロジェクトで調査した犬山の文化遺産を写真やパネルで紹介しました。また、犬山の文化遺産を歴史的に学ぶまぼら講座では、のべ107名の方にご参加いただきました。

墳丘のボランティア清掃活動『青塚古墳を守る会』では、地域の皆様を中心にのべ92名の方に参加いただき、ともに汗を流しました。

また、『瀬波史楽座』や『ニワ里カレッジ』、ワークショップなどの自主事業も青塚古墳で開催し、多くの方にご参加いただきました。

西尾市

詳細分布調査

昨年度に引き続き、西尾市教育委員会からの委託を受け、旧一色町および旧西尾市域で詳細遺跡分布調査を行いました。



■ 1.2 文化遺産！発見ウォーク 佐久島編
■ 3.4 歴史座 海の街、一色の文化遺産



■ 詳細分布調査の様子

本年度、西尾市から委託を受け、旧一色町および旧西尾市域3.9.4km²の分布調査を行いました。昨年度の旧幡豆町域で行った調査の継続事業です。

本年度は、一色町内および南部海上に位置する「佐久島」にて、二ワ里ねつとのスタッフで分布調査を行いました。調査では、既存の遺跡を歩き遺跡の現在の状況を確認できたことに加え、今まで遺跡と考えられていなかった多くの場所でも、新たに遺物を確認することができました。特に佐久島の調査では、今までノーマークであった島の北東部で、多くの遺物を拾うことができました。

この調査の結果は、平成27年2月に行った『文化遺産！発見ウォーク 佐久島編』および3月に開催した『歴史座 海の街、一色の文化遺産』で一般公開しました。特に、『歴史座』では、会場となった岩瀬文庫の研修ホールが満員になるほど多くのお客さんに来ていただくことができ、質問も多く飛び出す大変盛況な会となりました。本年度9月末には西尾市岩瀬文庫にて、調査の中で見つけた一色の『文化遺産のある風景』の写真展を行う予定です。ぜひご来館ください。

朝日遺跡

「まるまど貝塚の国」企画

愛知県清須市に存在する朝日遺跡、国史跡「貝殻山貝塚」や朝日遺跡出土の国指定重要文化財等を活用し、「朝日遺跡等普及啓発事業」を実施。



■ワークショップ『朝日遺跡の模型をつくる』



■『まるまど貝塚の国』企画展

「まるまど貝塚の国」見える化計画

東日本最大規模を誇る弥生集落・朝日遺跡の学術的価値や文化遺産としての魅力などを再発掘して、県民・地元住民にわかりやすいカタチでその魅力等を発信するための事業です。愛知県教育委員会と協業で企画・実施いたしました。

「コンテンツ」弥生たび

朝日遺跡のイメージを、遺跡現地により一層理解していただくため、ARコンテンツ（スマートフォンアプリ）を開発いたしました。

「まるまど貝塚の国」企画展と講演会

企画展『弥生王国 2014 まるまど貝塚の国 あいちの原風景が観えてくる』及び「講演会」を愛知県図書館で実施し、関連して写真展を名古屋市中心として数力所で行いました。

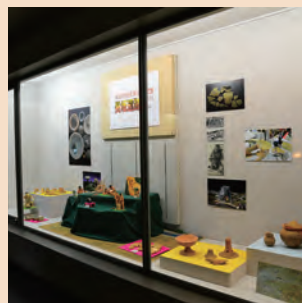
ワークショップ「朝日遺跡の模型をつくる」

遺跡の全容がわかるような、大形模型（縮尺 1/1000）を製作する。製作にあたっては、一般から参加者を募り、皆が協力して楽しい模型ができあがり、現在「貝殻山貝塚資料館」にて展示中。

その他

協働・委託事業

養老町の歴史文化資源普及活動、東之宮古墳普及啓発事業、尾張旭市普及啓発事業、美濃加茂シンポジウム事業など



■ 養老町の歴史文化資源普及活動
ワークショップ『キノコをつくろう!』

養老町の歴史文化資源普及活動

本年度養老町では、平成26年7月に火打石ワークショップ『養老町で火をおこそう』、9月に歴史講座『元正・聖武天皇の養老行幸を考える』、10月に文化遺産ウォーキング『養老公園石碑めぐり』、平成27年2月には『キノコをつくろう!』ワークショップを開催しました。

9月に開催した歴史講座の講師は、三重大学名誉教授の山中章先生。『元正・聖武天皇の養老行幸を考える』『養老美泉に魅せられた二人の天皇』というタイトルで、満員の会場の中講演が行われました。公演後のセッションでは、山中先生と、養老町の学芸員中島和哉さん、ニワ里ねつとの赤塚理事長の3人が、熱いトークを繰り広げました。

また平成26年11月8日から9日の間には、養老町ふるさと会館にて、企画展『養老町の遺跡紹介コーナー』を開催。養老町に存在する魅力的な遺跡を、写真パネルと遺物を使って楽しく紹介する展示の、開催のお手伝いを行いました。

その他協働・委託事業

犬山市では、東之宮普及啓発事業の一環で、パンフレットやシンポジウムの資料作成を行いました。また、子供向けのイベントに参加し、古墳消しゴムワークショップを開催し、子どもたちに大人気でした。

尾張旭市では、長坂遺跡を取り上げた企画展を開催、現在も尾張旭市スカイワードあさひにて開催中です。

また、美濃加茂市民ミュージアムでは、1月に開催されたミュージアムフォーラムにて、開催のお手伝いをしました。



■ 東之宮古墳シンポジウム

10月	11月	12月	1月	2月	3月
19 ニワ里カレッジ ①『名古屋城の礎 - 幅豆の矢穴石 -』 ② 伴野義広氏（西尾市幅豆歴史民俗資料館） ③ 10:00-12:00 ④ 青塚古墳ガイダンス施設 ⑤ 13 名 16 栗栖プロジェクト ①『縄文時代の衣 アンギンを学ぼう！(2)』 ② 名和奈美氏 ③ 13:55-15:30④ 栗栖小学校 18 まほら講座 ①『栗栖地域の縄文時代』 ② 縹織 茂氏（名古屋市教育委員会）③ 10:00-12:00 ④ 青塚古墳ガイダンス施設 ⑤ 28 名 07-12/07 企画展 ①『犬山街プロジェクトの軌跡-犬山の文化遺産』 ④ 青塚古墳ガイダンス施設 15 地域学芸員養成塾 ①『犬山の自然』 ② 森 勇一氏（金城学院大学） ③10:00-12:00 ④青塚古墳ガイダンス施設 ⑤30 名 17 地域学芸員養成塾 ①『伝統的建造物・犬山城下町』 ② 長谷川良夫氏（NPO 法人犬山城下町を守る会） ③ 10:00-12:00 ④ 青塚古墳ガイダンス施設 ⑤ 30 名 18 養老町文化遺産ウォーキング ①『養老公園石碑巡り』 ② 中島和哉氏（養老町教育委員会） ③ 9:00-12:00 ④養老公園周辺 ⑤ 17 名 その他 委託事業	1 まほら講座 ①『犬山の古墳時代』 ② 赤塚次郎氏（ニワ里ねっと） ③10:00-12:00 ④ 青塚古墳ガイダンス施設 ⑤ 28 名 20 地域学芸員養成塾 ①『羽黒城と伝承・物語』 ② 川島誠次氏（犬山市歴史まちづくり課）、広瀬まり氏 ③ 10:00-12:00 ④ 青塚古墳ガイダンス施設 ⑤ 30 名 21 地域学芸員養成塾 ①『入鹿池の文化遺産』 ② 小嶋 毅氏（犬山歴史研究会） ③ 10:00-12:00 ④ 青塚古墳ガイダンス施設 ⑤ 30 名 23 歴史座 of 犬山街プロジェクト ①『眠れる文化遺産が見えてくる…犬山、新・魅・力！！～3年間の街プロのキセキ～』 ② 特別講演：森 勇一氏（金城学院大学） ③ 10:30-15:30 ④ 犬山国際観光センターフロイデ ⑤ 75 名 西尾市詳細分布調査 東之宮古墳普及啓発パンフレット作成 16 あつまれいぬやまっこ（犬山市）参加 ① 東之宮古墳普及啓発のためのワークショップ ③ 10:00-15:00 ④ 犬山市南部公民館 16 シンポジウム（犬山市） ①『史跡東之宮古墳シンポジウム』での補助業務 ② 記念講演：白石太一郎氏（国立歴史民俗博物館名誉教授） ③ 10:30-15:30 ④ 犬山国際観光センターフロイデ ⑤ 250 名 08 朝日銅鐸物語 ～埋められた謎の祭器 19、20 考古学セミナー参加 ①『あいちの考古学 2014』ポスターセッション「朝日遺跡写真展」を実施 ②写真：中野耕司氏 ④ 名古屋博物館	7 ニワ里カレッジ ①『犬山城下町文化学 no.03- 粘土こねこね、自分だけの犬山焼を作ろう-』 ② 尾関立志氏（犬山焼本窯元 7 代尾関作十郎）、尾関佳子氏 ③ 10:00-12:00 ④ 青塚古墳ガイダンス施設 ⑤ 14 名 19 地域学芸員養成塾 ①『小牧長久手の戦いと文化遺産』 ② 小野友記子氏（小牧市教育委員会） ③ 10:00-12:00 ④ 青塚古墳ガイダンス施設 ⑤ 30 名 23 歴史座 of 犬山街プロジェクト ①『眠れる文化遺産が見えてくる…犬山、新・魅・力！！～3年間の街プロのキセキ～』 ② 特別講演：森 勇一氏（金城学院大学） ③ 10:30-15:30 ④ 犬山国際観光センターフロイデ ⑤ 75 名	17 まほら講座 ①『犬山城下町と犬山祭』 ② 長谷川良夫氏（NPO 法人犬山城下町を守る会） ③ 13:00-15:00 ④ 青塚古墳ガイダンス施設 ⑤ 24 名 15 地域学芸員養成塾 ①『青塚古墳と犬山の古代』 ② 赤塚次郎氏（ニワ里ねっと） ③ 10:00-12:00 ④ 青塚古墳ガイダンス施設 ⑤ 30 名 16 地域学芸員養成塾 ①『実習報告会』 ③ 10:00-12:00 ④ 青塚古墳ガイダンス施設 ⑤ 30 名 31 ミュージアムフォーラム（美濃加茂市） ①『文化遺産と市民-その関わり合いを考える 2015』での補助業務 ③ 13:00-15:30 ④ 美濃加茂市民ミュージアム ⑤ 44 名 まるまど冊子刊行	21 まほら講座 ①『犬山と木曽川』 ② 白水 正氏（犬山城白帝文庫） ③10:00-12:00 ④ 青塚古墳ガイダンス施設 ⑤ 27 名 犬山たび冊子刊行 犬山市域の文化遺産を紹介するパンフレット・全7巻 11 文化遺産！発見ウォーク ①『文化遺産！発見ウォーク 佐久島編』 ② 西松 賢一郎氏（大口町歴史民俗資料館） ③ 10:00-12:20 ④ 西尾市佐久島 ⑤ 25 名 08 歴史座 ①『海の街、一色の文化遺産』 ② 赤塚次郎氏（愛知県埋蔵文化財センター） ③ 13:00-16:00 ④ 岩瀬文庫⑤ 46 名 21 きのご栽培ワークショップ ①『キノコをつくろう！』 ② 津田 格氏（岐阜県立森林文化アカデミー）、中島和哉氏（養老町教育委員会）③ 9:00-12:00 ④ ふれあいセンター養老 ⑤ 17 名 23-H28.1.31 企画展（尾張旭市） ①『2000 年弥生ムラ 最古の集落遺跡』 ④ 尾張旭市スカイワードあさひ 14 公開セミナー参加 ①『歴史的遺産・景観文化と南アジア・東南アジアの現在』奥野絵美氏（ニワ里ねっと）が発表 ③ 14:00- ④ 同志社大学	

4月				5月				6月				7月				8月				9月							
ニワ里ねっと 自主事業				25 ニワ里総会 ① 記念講演『東大寺大仏さま散策マップをめぐって』 ② 深澤芳樹氏（（独）奈良文化財研究所） ③ 10:30- ④ 犬山ローレライ麦酒館 ⑤ 70名				22 ニワ里カレッジ ①『チベットの地理と風水 その1』 ② 坂野俊哉氏 ③ 10:00-12:00 ④ 青塚古墳ガイダンス施設 ⑤ 22名				17 ニワ里カレッジ ①『チベットの地理と風水 その2』 ② 坂野俊哉氏 ③ 10:00-12:00 ④ 青塚古墳ガイダンス施設 ⑤ 25名															
				01 犬山たびモニターツアー ①『モモ次郎と行く「犬山たび」栗栖編』 ③ 10:00-12:00 ④ 犬山市栗栖地区 ⑤ 25名								24 栗栖プロジェクト ①『縄文時代の衣 アンギンを学ぼう！(1)』 ② 名和奈美氏 ③ 9:00-11:00 ④ 栗栖小学校								21 ろくまるチャレンジ ①『歩こう！犬山木曾街道～善師野から前原、朝日へ～』 ② 小嶋 毅氏（犬山歴史研究会） ③ 9:00-12:30 ④ 善師野周辺 ⑤ 20名							
青塚古墳史跡公園活用管理				17 通波史楽座 ①『大王様とビーチャドンドン』 ③ 10:00-12:00 ④ 青塚古墳史跡公園 ⑤ 1,176名								31 青塚こども教室 ①『あおつか調査団 古墳の大きさを体感せよ』 ② 西松賢一郎氏（大口町歴史民俗資料館） ③ 10:00-12:00 ④ 青塚古墳ガイダンス施設 ⑤ 13名								17 メンテナンスセミナー ①『充填剤を学ぶ』 ② 岩月真由子氏（岩月文化財保存修復研究所土器部） ③ 10:00-16:00 ④ 青塚古墳ガイダンス施設 ⑤ 13名							
【年間入館者数】 14,243名								16 青塚古墳を守る会 ①『青塚古墳を守る会』 ③ 7:30-9:30 ④ 青塚古墳史跡公園 ⑤ 45名				07 青塚こども教室 ①『縄文時代の布、アンギンにチャレンジ！』 ② 名和奈美氏 ③ 10:00-12:00 ④ 青塚古墳ガイダンス施設 ⑤ 17名								16 青塚古墳を守る会 ①『青塚古墳を守る会』 ③ 7:30-9:30 ④ 青塚古墳史跡公園 ⑤ 47名							
犬山街プロジェクト 犬山市 文化遺産活用活性化事業																				19 地域学芸員養成塾 ①『犬山の歴史概要』 ② 赤塚次郎氏（ニワ里ねっと） ③ 10:00-12:00 ④ 青塚古墳ガイダンス施設 ⑤ 30名							
西尾市詳細分布調査								19 幡豆散策 ①『海の街、西尾市幡豆散策 東幡豆町編』 ② 伴野義広氏（西尾市幡豆歴史民俗資料館） ③ 9:00-12:15 ④ 東幡豆町 ⑤ 17名												26 地域学芸員養成塾 ①『木曾川と公園化計画の歴史と文化』 ② 可児光生氏（美濃加茂市民ミュージアム） ③ 10:00-12:00 ④ 青塚古墳ガイダンス施設 ⑤ 30名							
																12-24 幡豆写真展 ①『幡豆調査記録 幡豆の文化遺産写真展 by ニワ里遺跡調査隊』 ② 写真：中野耕司氏 ④ 岩瀬文庫											
養老町歴史文化資源普及活動								02 養老町歴史ワークショップ ①『養老石で火をおこそう』 ② 水野裕之氏（名古屋市教育委員会） ③ 9:00-12:00 ④ ふれあいセンター養老 ⑤ 46名												13 養老町歴史講座 ①『元正・聖武天皇の養老行幸を考える』 ② 山中 章氏（三重大学）、赤塚次郎氏（ニワ里ねっと）、中島和哉氏（養老町教育委員会）③ 9:30-11:30 ④ 山口会館 ⑤ 50名							
								28 ワークショップ ①『朝日遺跡の模型を作ろう』 ② 富田 崇氏 ③ 10:00-12:00 ④ 清洲貝殻山貝塚資料館 ⑤ のべ30名								06 ワークショップ ①『昆虫化石を探そう』 ② 奥野絵美氏（ニワ里ねっと） ③ 13:00-15:00 ④ 清洲貝殻山貝塚資料館 ⑤ 13名											
朝日遺跡まるまで企画 朝日遺跡等 普及啓発支援事業関連				日時 イベント名 ①『講演名、イベントタイトル』 ② 講師名 ③ 開催時間 ④ 開催場所 ⑤ 参加者数								26 ワークショップ ①『朝日遺跡の模型を作ろう』 ② 富田 崇氏 ③ 10:00-12:00 ④ 清洲貝殻山貝塚資料館 ⑤ のべ30名								20 ワークショップ ①『朝日遺跡の模型を作ろう』 ② 富田 崇氏 ③ 10:00-12:00 ④ 清洲貝殻山貝塚資料館 ⑤ のべ30名							
活 動 年 表 20 14												11-9.20 企画展示 ①『朝日遺跡』 ② 写真：中野耕司氏 ④ 愛知県図書館															
																10 公開講座 ①『弥生王国 2014 まるまで貝塚の国 あいちの原風景が観えてくる』 ② 石黒立人氏（愛知県埋蔵文化財センター）、永井宏幸氏（同左）、金川千早氏（ナカジャクリエティブ株式会社）、赤塚次郎（ニワ里ねっと） ③ 13:00-16:00 ④ 愛知県図書館 ⑤ 70名								20 史跡散策 ①『弥生たび まるまで貝塚の国・朝日遺跡』 ③ 13:00-15:00 ④ 清洲貝殻山貝塚資料館 ⑤ 16名			

文化遺産「学」とNPOセクター

NPO法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク

赤塚 次郎

1) 「考古学情報の標準化」と幻想

僕は考古学を楽しんできました。仕事として埋蔵文化財にも長年たずさわってきた。だが、あるきっかけを転機として、ふと、疑問をいだくようになった。それは論考制作において、資料操作過程の出来事であったように記憶している。考古学データというものがいかに無秩序な集合体であるのか……。考古学情報界限での集まりではそれがより鮮明になっていた。多くの先行研究がシステム創りに過大な努力を支払ってきたが、一つとして成功例はないといっても過言ではなからう。それは何故だ。

長い歴史をもつ、いわゆる「考古学演習」は、まさに多様であり「大学・機関・地域」などにより独特の進化を遂げてきた。良い意味では多

様で面白い。一方で統一性に欠け無秩序でもある。それは、いつてみればそれぞれに「お作法」があり、「習わし」があるからだ。実は、そこに「標準化」を阻む高く・厚い壁が存在する。各機関による独自の進化と閉鎖的なモノの考え方。考古学が総合的「科学」として進化できない根幹が横たわっている。

長い間「考古学情報の標準化」を訴えてきた。その基本は、ただ単に「コアデータ・スタンダード」だけを目指し、それを共有し、実施したい。というコンセプトであった。だが、その実現化は狭義の内にあり、ことごとく具体化できなかった。

今日的な状況は、もはやデジタル化は避けては通れない「道」となっている。だがしかし、やはりここに至るもまだまだ「標準化」へのしたたかな抵抗が現存する。とても面白

い。そこで僕は、ある時期からもう、すべてあきらめて「考古学情報の標準化は幻想であった」と考えるようになった。

2) 文化資源・遺産学センターへの憧憬

さて、皆さん。考古学情報や埋蔵文化財情報は、本来何のためにあるのか。そしてその目的は何なのか。よく言われるフレーズはこうだ。「地域の歴史を解明する事」「地域そのものをアーカイブする事」。そうでもあるが、さらに突き詰めて行く必要がある。僕は以下の一言に収斂されると考えるようになった。

それは究極的には「街づくり」にある、と考える。

多くの奇妙な歴史的「お作法」に縛られた現在の考古学業界。この「標準化を拒む壁」を止揚するための方策として、地域の「街づくり」という土俵に身を委ねることを提案したい。その事によって、はじめて、いや、素直に地域の「財」と受け止められる事が可能となる。そして雑多な考古資料群たちが、生活の貴重な情報と化し、活かされると信じたいのである。

(埋蔵)文化財研究は、主に遺跡などの遺物・遺構を中心として「考古学」の枠内で研究・分析されてきた。その過程で、よく関連諸科学との連携を謳うのであるが、それはあくまで考古学的な土俵からの視点や評価のつまみ食いではない。いまだにそうだと思う。社会科学系や自然科学系の学問を交えた新しい総合科学的な視座を目指すも、しかしそれも縦割りの枠組みを打破できず、諸学の寄せ集めであり、さらに専門分化するほどに、かえって蛸壺化現象に陥る傾向が強い。





では文化資源・遺産学はどのようなか。数年前からあるトレンドになりつつあったが、新しい学間を目指すという志向性が誕生し、大いなる期待が生まれた。だがその実態はまだまだ、具体的な行動はあくまで従来の諸学の「井の中」にあるのではないかと思いたくなる。やはり、そういう立ち位置ではなく、まずもって第一に隔離された教室から抜け出す事。そして「場面から特定のモノだけを取り出し」比較研究する事を止め、多様な文化遺産が息づく現実

の地域社会そのものへ溶け込む・身を委ね、「全体像」「総体」を見極めることが不可欠だと思う。「その場の正体は何なのか」と問うてみる。文化遺産を文化資源として現実はどう考え、どう捉えるかだ。具体的な生活の場、そこに深く沈殿した歴史レイヤーを静かに見つめながら、その場でしかない、近未来の志向性を多様な手法（学問）と多様な人材・ネットワークを駆使して、見つけ出していく事が求められている。文化遺産に寄り添う・住まう「学」でありたい。

3) 文化遺産を楽しむための

「NPOセクター」

我々の諸先輩たちが、日々の生活の中で、仕事や家庭を犠牲にして苦心惨憺「発掘調査」を実施してきた時代があった。本来「発掘調査」を担っていたのは第一セクター（国・地方公共団体が経営する組織）ではなかったはずだ。むしろ市民の自主的な活動部隊が主役だった時代がある。民間の私企業（第二セクター）が本格的に参入したのは近年であり、柔軟性と機動性・専門性を武器に主力機関として成長しつつあるようだ。またそうであって欲しいと期待する。そして「第三セクター」だ。もともと第三セクターとは、NPOや市民団体などの非営利団体を指すのであるが、何故か我国では、国・地方公共団体と民間が合同で出資・経営する企業である場合が一般的なように受け止められている。いずれにせよ今一度、市民側に寄り添う第三セクターに遺跡の現場を任し、主導権そのものを取り戻す必要があるのではなからうか。まずは「第三セクター」からの新しい「遺跡調査・研究」の提案からは

じめてみたものである。そこに進化した専門性の高いミッションをもつNPOセクターの存在は欠かせない。実績を背負って現役をリタイヤする者。僕もそうである。考えよう。楽しもうではないか・・・。

地域の歴史文化や風土を創造し、継承し、評価するのが文化資源・遺産学センターであるとすれば、その実践を委ねるのは地域社会に溶け込んだ実行部隊であり、そこに活躍する組織は、NPOセクターが中核となる。そんな夢を見るのである。行政・「学」センター・第2・第3のセクターという「協働」が新しい風景を造る事を夢見たい。そしてめざすは、時空間を往き交い多様な実生活の歴史を受け止め楽しむ。場面としての「時の市場」の創設である。

（本内容は、金沢大学人間社会研究域附属 国際文化資源学研究センター第8回文化資源学セミナーでの発表要旨を基に作成したものである）

ある表象の作用

—岐阜県深橋前遺跡出土土器の分析から—

NPO法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
中谷正和

ひょうじょう【表象】「representation」(英、「representation」(仏)の翻訳語。一般的に①ものの「再現」や「再・現前」、②「代行」・「代表」、③舞台における「上演」を意味する。

(小林2006を一部改変して抜粋)

本稿は、弥生時代から古墳時代へと移り変わるころにみられた、ある表象に関する事例研究である。

*

岐阜県関市深橋前遺跡は、濃尾平野を南流する長良川中流左岸の丘陵上に位置する、弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡である(図1)。

本稿の分析対象となる土器は、この丘陵の斜面で確認された竪穴式住居跡(SBE06)から出土した。

ひとつは、報告書では2103と

して報告された小型の土器である。法量は、高さ17.4cm、最大幅13.9cm、容量1.08リットルを測る(図2、図4・12)。

形態の特徴は、微かではあるが受口状の有段を表現した口縁部と、無花果形の胴部。そして底面に凹みをつけることによって自立可能な小さな平底を備える。

わずかな屈曲をもつ受口状の口縁部には、それぞれ振幅が違う二条の篋描き波状文を持つ。胴部には、最大径部に篋描きによる横走直線文。そして直線文を挟んで上下には、篋描きの斜格子文を描く。

煮炊きによる煤や焦げは認められない。日々の食事に用いるには小さな容量と、通常火にくべることをない土器に使われる緻密な胎土は、製作当初から日々の煮炊きに向う意図がなかった可能性を示唆する。



藤根久らによる胎土分析の結果、粘土の産地は深橋前遺跡周辺ではなく、美濃加茂・可児周辺域(瑞浪層群)の可能性が指摘された。そこは深橋前遺跡から20kmほど南東の、美濃加茂盆地周辺に相当する(藤根・今村2003)。

もうひとつは、2102と報告されたS字状口縁台付甕(以下、S字甕)である(図2、図4・14)。法量は、最大幅27.5cm、現存高25.2cm。完形であれば高さが約35cm、容量は9リットルを超える大型の煮炊き具であるが、本来あるべき底部と脚台を欠く。

しかし底部や脚台を欠く点を除けば、表面や形態の特徴、圧倒的な器壁の薄さは、濃尾平野で見るS字甕そのものである。型式は赤塚次郎の分類によるS字甕A類新段階、時期は廻間I式後葉(赤塚1990)。

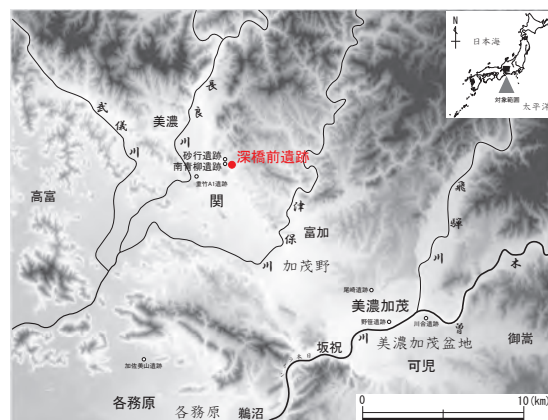


図1 位置図

深橋前遺跡が位置する関市周辺域では、2102のような古相のS字甕は客体的である(吉田1994)。

2102の胎土も分析され、深橋前遺跡周辺で採取できる粘土と同じ特徴を持つと報告された。しかしその胎土には遺跡周辺では産出しない重鉱物が含まれており、深橋前遺跡由来の胎土の典型例からは除外された(藤根ほか前掲)。

なお、2102には煤と焦げが付着している。焦げの存在は有機物を煮たことを示すが、底が無くては煮炊きなど出来ない。脚台や底部が欠

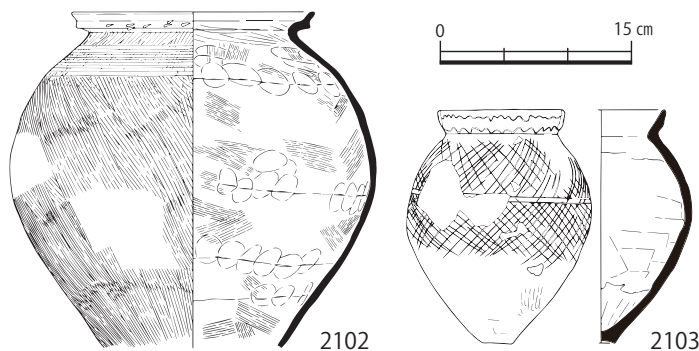


図2 深橋前遺跡 SBE06 出土土器

けたのは、煮炊き後のことである。さて、SBE06の内部からは、焼土や炭化材が多数確認された。いわゆる焼失住居跡である。硬く踏みしめられた床面に目立った焼土面はなく、火に覆われていた時間はそれほど長くはないと考えられる。

2103は、出土した破片を繋ぎ合わせた結果、ほぼ完全な形に復元できた。完形で床面に据え置かれていたのであろう。

縄文時代晩期の突帯文土器の流れを汲み、弥生時代前期の遠賀川系土器の波及以降も、それとの関連を保ちつつ文様（注1）や器種組成に独自性を示したのが条痕文系土器である。

この土器系統は東海地方を中心に広い地域で確認でき、伊勢湾岸を中心とする濃尾平野低地部（以下、低地部）では、凹線文系土器が波及する弥生時代中期末に姿を消した。

一方、2103が出土した濃尾平野内陸部（以下、内陸部）では、深鉢状の器形・細い簾状工具による条痕・口縁部内面の連続刺突・底部外面の布目圧痕を持つ条痕文系土器が、古墳時代前期まで製作され続け

*

また2102も底部と脚台以外は、ほぼ全て残存する。底部の欠けた部分は平らに均され、脚台を欠くとも自立可能である。この状態で床に据え置かれたと推測される。

ふたつの土器は、ほぼ同じ堆積土層から出土し、床面に並べて据え置かれていたように、炭化材の下敷きとなっていた（図7）。

た（石黒・宮腰2007）。

内陸部における弥生時代後期から古墳時代前期の土器組成は、この条痕文系土器に加え、低地部に由来する山中式・廻間式土器が組み合うことで成り立っている。

これら内陸部から出土する当該時代の甕は、単純化すると次のような変遷をたどる（図4、注2）。

【弥生時代後期～古墳時代初頭】

- ・条痕文系土器・受口状口縁甕（以下、受口甕）が組成する。
- ・平底が主体。
- ・加飾（口縁部の刻み・肩の刺突とヨコハケ）が定着。

【古墳時代前期】

- ・条痕文系土器・受口甕は存続。
- ・S字甕A類が加わる。
- ・平底が残存する。
- ・条痕文系・受口甕の無文化。

実のところ当該期の甕の個体差は、同時期の低地部に比べても比較的特徴である。また甕の型式変化も現状では不明瞭な点が多く、土器変遷の把握は、高坏の型式変化に頼るところが大きい。

さて、報告書では2103が近江地方の受口甕に影響を受けた土器と

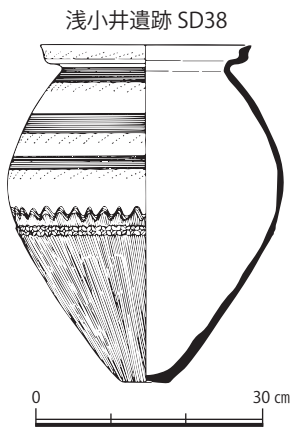


図3 近江湖南甕

結論された。理由は特に示されていないが、次の特徴から総合的に判断されたと考えられる。

①受口状の口縁部。内陸部伝統の甕は口縁部に屈曲を表現しない。一方、近江地方で作られる甕は、受口状の口縁部形態を特徴とする。

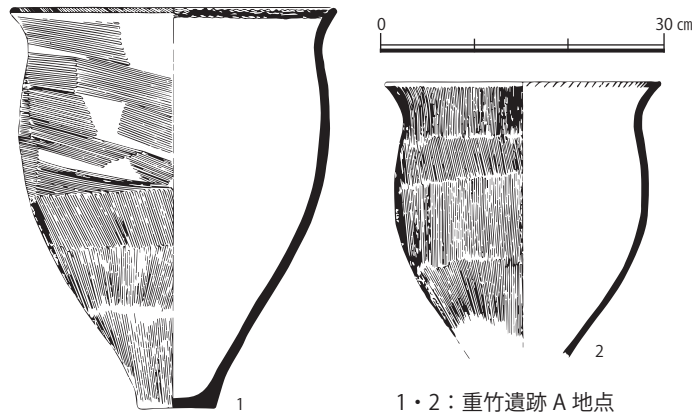
②濃尾平野から湖北地方の甕は、この時期脚台を持つ甕が主体的である。湖南地方は伝統的に平底の甕を産する。（ただ、内陸部の条痕文系土器は、平底の甕が主体である。）

③斜格子文・波状文の組み合わせは、濃尾平野では比較的珍しい文様であるが、湖南地方では、この文様の組み合わせをもつ受口甕がある。

しかし、湖南地方の受口甕（図3：以下、近江湖南甕）の分布の核は、弥生時代後期前葉（八王子古宮式）の濃尾平野低地部から中勢にあり、当該期の内陸部は該当しない（矢作・

赤塚2003)。

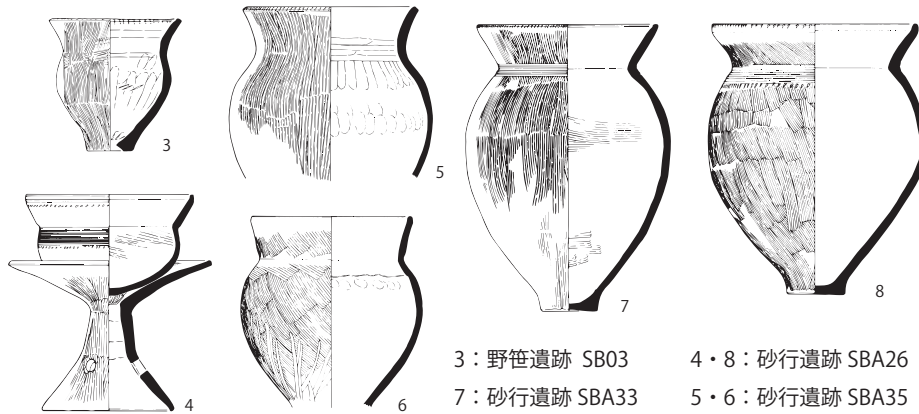
また当の湖南地方における近江湖南甕の加飾は、主に弥生時代後期に見られるものである。古墳時代前



1・2：重竹遺跡 A 地点

弥生時代後期前葉

弥生時代後期後葉
古墳時代初頭



3：野笹遺跡 SB03

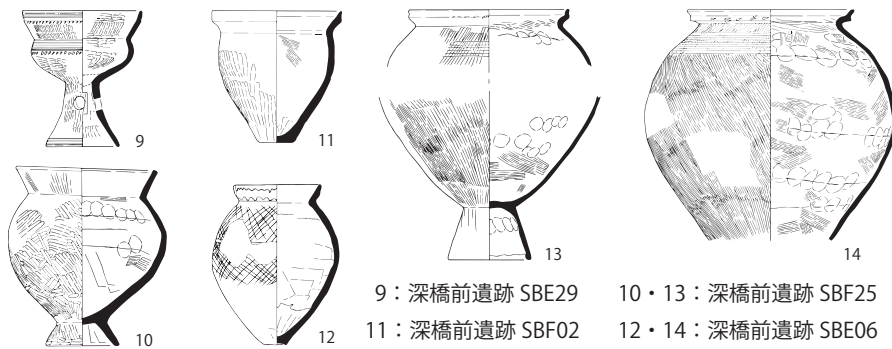
4・8：砂行遺跡 SBA26

7：砂行遺跡 SBA33

5・6：砂行遺跡 SBA35

期(廻間I式後葉併行期)まで時期が降ると、一般的な傾向として、近江湖南甕は無文化していく(伴野2006)。

古墳時代前期前葉



9：深橋前遺跡 SBE29

10・13：深橋前遺跡 SBF25

11：深橋前遺跡 SBF02

12・14：深橋前遺跡 SBE06

2103はS字甕A類新段階である2102と共伴していることは明らかであり、その時期は古墳時代前期(廻間I式後葉)である。この時

図4 関市周辺域の弥生時代後期～古墳時代前期の甕・鉢

期、加飾ある近江湖南甕は、内陸部だけでなく湖南地方でも減少傾向にある。主だった甕が無文化するなか、加飾ある甕はS字甕A類が該当する。2103はS字甕A類を再現した可能性が高い。

*

2103がS字甕A類の再現であるなら、なぜ次のような相違点が生じたのだろうか？

《部 位》 S字甕A類 ↓ 2103

● 文様の相違点

《口縁部》 押引刺突文 ↓ 波状文

《肩 部》 ヨコハケ ↓ 横走直線文

《胴 部》 羽状ハケメ ↓ 斜格子文

● 器形の相違点

《口縁部》 受口(S字) ↓ 受口状

《底 部》 脚台 ↓ 平底(注3)

属性の変化としては、例えば刺突文が波状文に置換された事例など、図像表現における幾何学的モチーフの置換もしくは変容現象は、頻繁ではないものの内陸部のみならず、地域を超えて認められる現象である。

さらにいえば、2103に見えるジグザグの波線や格子状のモチー

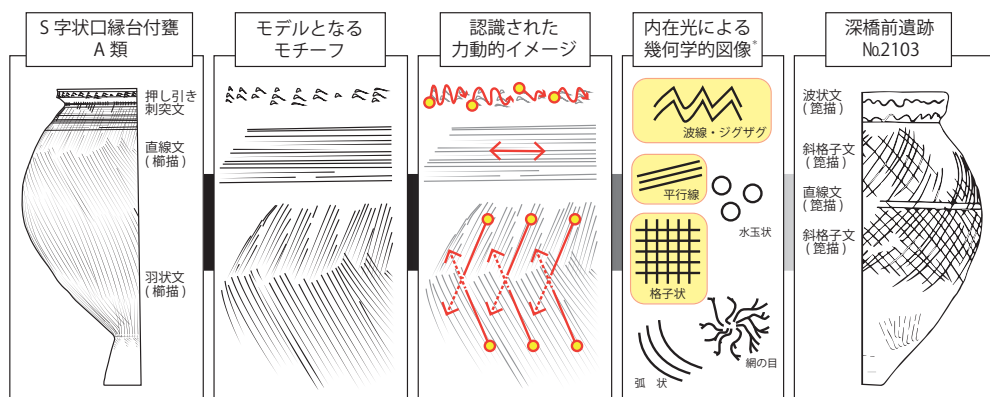


図5 文様の変容（模式図）

フは、列島各地から遠く西欧は3万5千年以前からの後期旧石器時代人（ホモ・サピエンス）が描いた絵画表現にも現れる汎文化的な、ありふれた図像表現でもある。

普遍的現象、という点がここでは重要と考える。なぜなら、この現象が地域・文化的な伝統といった類のものではなく、広く人類一般に共通する仕組みに由来する可能性を、この普遍性が示唆するためだ。

この現象について心理学者らは、内観や薬物投与下の幻覚において、ジグザグの波線や格子、点や同心円、螺旋、平行線、蛇行する線などの幾何学的な図像表現を、被験者らが外界から光の刺激を受けずに「見えた」ことを報告している。ロナルド・K・シーゲルは、これら幾何学的な図像表現が、人間の脳や神経システムによって生理学的に生み出されるものであり、ヒトである以上、誰もが目を閉じていても開いていても経験できる無意識的な現象（内在光学現象）であると指摘した（Siegel 1977）。さらにデイヴィッド・ルイス＝ウィリアムスは、シーゲルら神経心理学者らの研究を踏まえつつ、後期旧石器時代の洞窟絵画の分析を行い、そこで内在光による幾何学的図像が幻覚へと移行し、それが絵画などの表現に組み込まれると主張した（Lewis-Williams 2004）。

これらの議論を踏まえるならば、2103に表現された文様が、格子状図形としての斜格子文と、振動パターンとしての波状文として表現された理由を、生理学的現象に由来する内在光学的な像に求めることを推測できるのではなからうか。

それは、2103の作者が、モデルとなる文様全体を、スナップショットのような静的な図像として記憶したのではなく、文様線を目で辿るときの眼球刺激のような身体感覚を通して（注4）、地震計もしくはクロノフォトグラフィー（注5）しながら文様線それぞれの方向、筆触、ベクトル的な軌跡を認識する。そしてその力動的な認識は、土器製作の過程で、脳固有の神経構造に由来する内在光学的図像表現へと事後的に合理化され、表現される——という可能性である（図5、注6）。

ならば、2103は形象化された像の輪郭ではなく、像の形象化へと至るまでの力動的・エネルギー論的なイメージの産物であるとともに、作者の知識よりも、むしろ脳にあらかじめ組み込まれた知覚と図形パターンの参照という、作者の内的・

主観的经验に基づく再現物だったといえるだろう。

*

さて、2103の再現にかかわるイメージの連鎖が、作者の知覚や感覚という身体経験を基盤とするのであれば、同じ身体を基盤とした土器製作の動作との関連が予想される。モデルとなったS字甕と、2103の製作過程を比較してみよう。

S字甕の製作技法を分析した赤塚次郎は、その手順が非常に齊一的なものであることを明らかにしている。その手順は、まず粘土帯積み上げ技法によって脚台↓胴部下半↓胴部上半↓口縁部の順に成型し、次に羽状ハケメ↓ヨコハケ↓押し引き刺突文の順に文様を描く（赤塚1986）。2102も、欠失した部分はあるものの、赤塚が指摘したものと同一の製作過程をたどる。対して、2103の製作過程は、文様線の描き順から次のように復元できる（図6）。

（i）祖型となる小型平底甕の成型
粘土帯をつみあげて外形を成形す

る。この時は、口縁部も受口状の有段表現のない単純なものであった。

(ii) 上段斜格子文の描線

運筆は口縁部側(上)から底部(下)方向。まず、左下がりの線を描線した後、右下がりの線を加える。すべての線は、上から見て反時計回りに施文される(注7)。

(iii) 口縁の成形と波状文の施文

横走直線文よりも口縁部の調整が先とした理由は、ひとつは胴部最大径の上段斜格子文をつぶす指圧痕に

ある。この指圧痕は、口縁・頸部の調整・施文時に、土器本体を指で支えた時に付着した可能性が高い。またもうひとつの理由として、口縁部成形時のものと考えられる頸部ヨコナデにより、上段斜格子文の始点が

消されている点も挙げられる。なお口縁部ヨコナデの目的は、ナデで口縁部側面を凹ませS字状の屈曲を表現することにあると考えられる。

(iv) 横走直線文の施文

下段斜格子文の右下がりの線の始

点が、直線文の直下で平仄を揃えている。何も目印のないところで始点を揃える必然性もなく、またそれを実行するほうが難易度は高い。下段斜格子文は直線文よりも後に描かれたと推測する。

(v) 下段斜格子文の描線

右下がりの線は、上から見て反時計回りに施文される。始め下から上へと向かう運筆は、最後には上から下方向へと変化する。左下がりの線も、上から見て反時計回り。下段斜

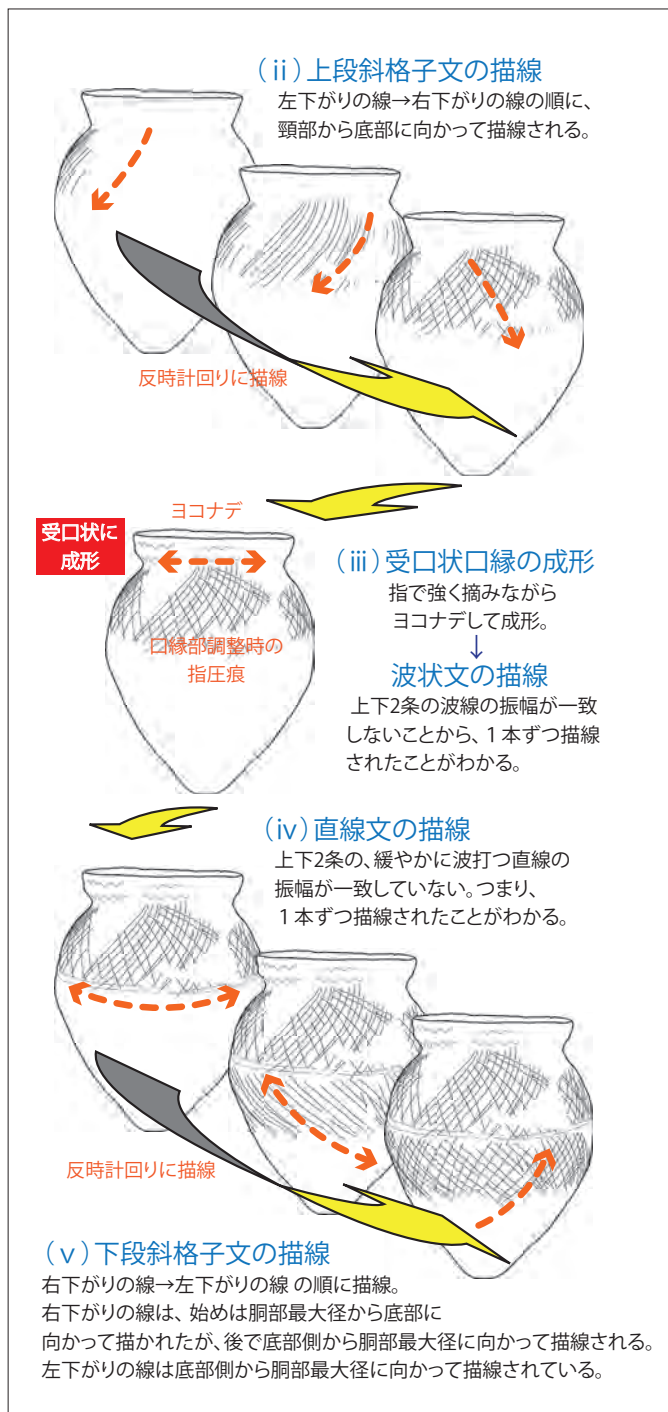


図6 2103の製作過程

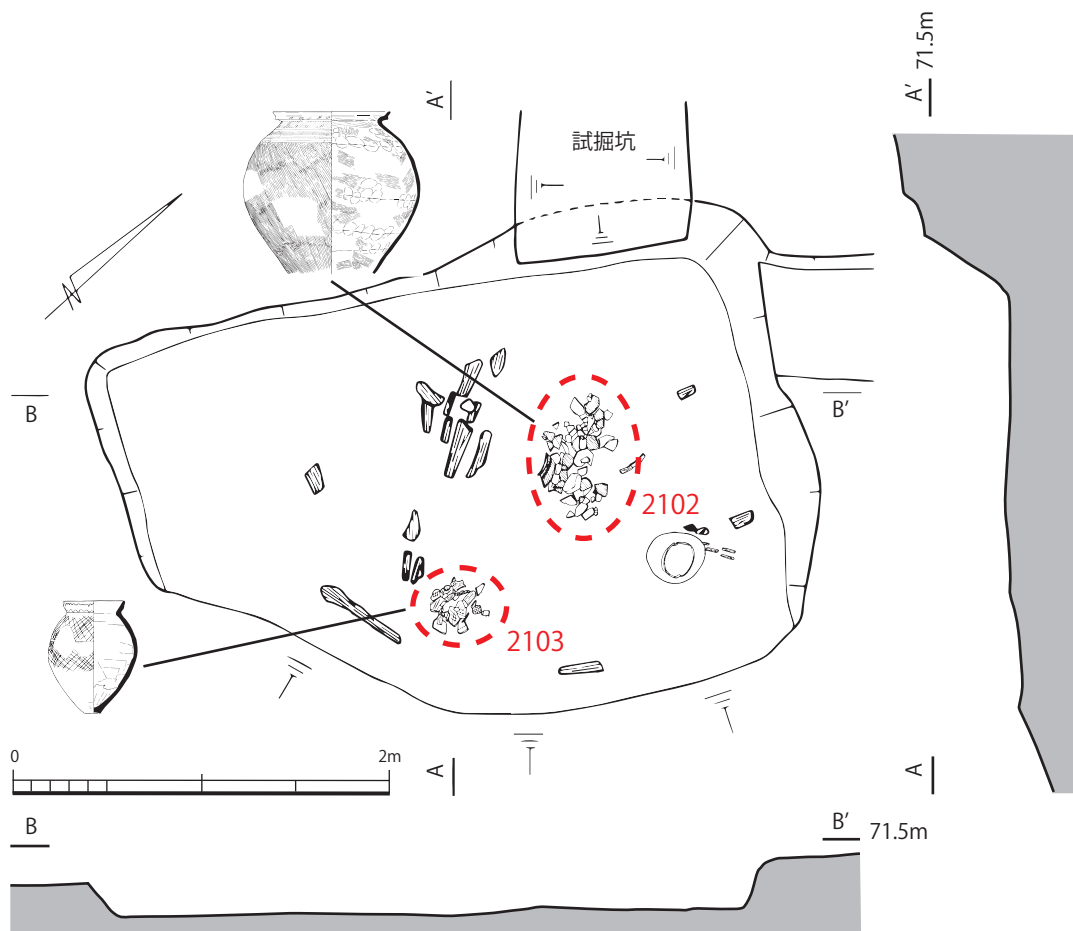
格子文は、たびたび運筆が上下入れ替わるものの、全ての文様施文が、上から見て反時計回りに進行する。上段斜格子文と、斜格子の線描が逆になるのは、線描時に土器の上下を入れ替えたためか。

このように復元された2103の製作の手際は、赤塚が明らかにしたS字甕の製作手順と比較する限り典型的な手順とは一致しない。

そればかりか、製作の途中で形を変形し、しばしば上下が入れ替わる断片的な描線からは、2103の作者が、土器の完成形をしっかりと定めてから形を整え文様を描いたのではなく、口縁部形態や胴部文様を描く所作それ自体と、その結果としての生成物が、次なる形態と文様を逐次的に想起させたように思える。

2103の作者によるS字甕のイメージの発露と凝固は、オリジナルのS字甕のように秩序だったものではなく、粘土をこね、文様を描画していく「いま・ここ」の状況に依存した感覚や運動と一体のものであった可能性は高いと思われる。

*



2103と2102は同じ竪穴住居から出土した。両者ともに同じ堆積土層中にあり、炭化材の下敷きと

なっている。いずれの土器も、現在確認できる姿のまま、ほぼ同時に床の上に並べられ、火災による木造構

図7 深橋前遺跡 SBE06 土器出土状況

造物の崩壊に巻き込まれたことは間違いない(図7)。

2103がS字甕を再現したものと考えられるならば、2102と並置するという操作は、我々が考える「S字甕」のような、両者をつなぐ何か

が認識されていたからだろう。しかし、2103はS字甕を再現しつつも、形態・文様ともに再現性は低い。そのため、我々が2103を近江系の甕と取り違えたように、当時の人々であつても、2103をS字甕ではない別系統の甕として認識する可能性を残している。

また2102も、煮炊きという機能や文様・調整において典型的なS字甕であるに関わらず、脚台が欠け、あたかも平底のような外観を見せている。

正直なところ、形態的には同一とはいえないが、共に不完全な両者の奇妙な対称性に統一感を持たせるものは、文様と形態の緩やかな共通性だけである。厳密な一致点をもたない外見から、両者に類似性を見出すためには、文様や形態に残る力動的なイメージと、両者が「いま—ここ」に同居することに基づく、主観

的な感性に頼るほかない。

また、機能面での両者の均衡をあえて求めるとしても、元から煮炊き本来の機能を考慮しない2103と、本来の煮炊きの機能を備え、かつ実際に使用されたにも関わらず、底部を欠くことで機能を喪失した2102という、鏡像のように反転する振じれた対称性から導くしかない。いずれにせよ、ふたつの土器をつなぐ何かが存在したとしても、それは理想的なS字甕たるアイデア的(注8)な即自的イメージではないはずである。

つまり、2102と2103両者の関係は、S字甕のオリジナルとコピー、意味を指示するもの／指示されるものといった、どちらかに従属を強いる関係ではない。むしろ、2103に表現された外徴を「しるし」として、積極的に両者が交わる点に類似性を生み出し、両者を「いま—ここ」に並べることによって、その意味するものを両者において表現する関係にあつたと推察する。

*

2103という奇妙な土器の、製作から埋置までの一連のイメージの連鎖には、視覚が重要な役割を果たしたことは疑いない。しかし、そこにみられる常に輪郭をつかみ損ねたかのような、たどたどしい一連の結果からは、現在の我々からみて本来あるべき視覚的記憶を十分に活かされていないような感覚を覚える。

だが、我々が感じるもどかしさは、これら一連のイメージの連鎖が、ふ

つう我々が再現に求める図像的同一性を原理としていないことに起因する。それは、いわば伝言ゲームのように、いま表現したものが、これまでの文脈に身を委ねつつ、次の動作・表現の呼び水として新たなイメージの源泉となるという、すべて隣接的・逐次のな類似に基づくものであった。

これら一連の連鎖の通奏低音のひとつが、文様の齟齬から明らかになった力動的イメージ―強度的形象像の持続であり、もうひとつは、その都度の表象像をかき乱し動揺させる過剰な現在、「いま―ここ」の介入である。

これらは、あくまでも状況依存的な内的（主観的）経験に則ったもの

であり、全体的・系統的な秩序に基づくものとはいいがたく、とても技法・作法などと呼べるようなものではない。

けれどもそれは、例え感覚的にはほんのわずかの類似であつても、配置や文脈から積極的に類似性を創り出す操作であり、刻々と変化する時代や文化に対応できるひとつの能力として、積極的に評価可能な原理でもあるのではないか。

*

冒頭で引用したように、表象とは、①ものの「再現」や「再・現前」、②「代行」・「代表」、③舞台における「上演」を意味する。それゆえ創り出された表象それ自体は、常に二次的な複製としての立場を甘受しなければならず、一種幻想的な姿のまま現在に編み込まれ、起源から一定の距離を保ち続けるほかはない。だとすれば、これまで論じてきたような、S字甕として再現され、その代行として一連のイメージの連鎖を生み出していく2103の振る舞いは、まさに表象の活動そのものとい

えるだろう。

しかしながら2103は、表象の働き自体はともかくとして、製作されたもの自体はあくまでも特殊例に留まり、とても普遍的な事物であつたとはいいがたい。これも、過度の「いま―ここ」の介入によつて、2103がS字甕の単なる複製からは一線を画したことによる。そのような意味での唯一性を獲得した2103は、普遍的なその他の甕と同じ性質の再現なのか、さらなる検討を必要とする（注9）。

さらにいえば、それらが絶えず普遍性を排出する仕組みから同じく生み出されたのだとしても、個体差を無視できるほどの同一性を認識するS字甕のそれらとは、また鮮やかな対照をなしている。定型を反復するイメージ連鎖の問題も、今後の課題であろう。

資料閲覧にあたり便宜いただきたい、岐阜県文化財保護センターの小野木学氏・長谷川幸志氏に御礼を申し上げます。

【脚注】

*注1…本稿では、装飾効果のある調整を含む意味で用いる。

*注2…地域色、編年観等は次の文献を参照した（赤塚1990・2001、石黒・宮腰2007、藤田・高木2002、恩田2004）。なお、本稿の時代区分は便宜的に次のように区分している。【弥生時代後期前葉】高木編年Ⅴ・Ⅰ様式・赤塚編年八王子古宮式・宮腰編年砂行B類1期、【弥生時代後期後葉】古墳時代初頭、高木編年Ⅴ・Ⅱ・Ⅵ様式前葉・赤塚編年山中式・宮腰編年砂行B類2・3期前葉、【古墳時代前期前半】高木編年Ⅵ様式後葉・赤塚編年廻間Ⅰ式後葉・宮腰編年砂行B類3期後葉。

*注3…S字甕の脚台が省略され平底になった過程については、単に製作された地域の伝統に解を求めるのは早計かもしれない。S字甕が小型化するにあたり、底部形態が平底化した事例は、愛知県朝日遺跡第3区SA001―68例などがある（愛知県教育委員会1982）。いずれも同じ時期の所産と考

えているが、地域的な隔たりは大きい。今後の事例増加を待って判断したい。

*注4…ロバート・ベドナリックは、光以外の眼球の刺激によって引き起こされる光感覚（閃光感覚）が、類像的イメージの発生に関係する（主張）（Bednarik 1994 p.178）。

*注5…運動という現象を、画像や写真に記録することで視覚的に表現したもの（松浦2001）。

*注6…ここで言及した「クロノフォトグラフィ」さながらのベクトルの認識」とは、このような画像表現が記憶されているという意味ではなく、「結果としてクロノグラフィのように表現される」力動論的イメージの認識を指す。

*注7…佐原真によると、反時計回りの施文は、作者が土器を左手にもち、右手で文様を描いた結果とされる。また右利きの人が右手で斜線を描く場合、その斜線は勾配が緩く、かつ長い左下がりの線となる（佐原2005、83～86頁）。

*注8…「あくまで後知恵の虚構として復元するよりほかに接近の手段がないような理想」（稲賀2008、52頁）。

*注9…そもそも、2103と同じ文化の邇に、多数派を形成しうるほどの普遍的同一性があるのかという問題もあるだろう。

【参考文献】

愛知県教育委員会、『朝日遺跡』、加藤安信編、1982年。
赤塚次郎、「S字状口縁台付甕 寛書・85」、『年報昭和60年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター、1986年、64

～69頁。

——、『土器・土器群の形成』、『廻間遺跡』、（財）愛知県埋蔵文化財センター、1990年、110～117頁。

——、『濃尾平野における弥生時代後期の土器編年』、『八王子遺跡考察編』（財）愛知県埋蔵文化財センター、2001年、25～48頁。

伴野幸一、『近江地域—野洲川流域を中心に—』、『古式土師器の年代学』、大阪府文化財センター、2006年、49～66頁。

Bedarick, Robert, "Art origins," *Anthropos* LXXXIX, 1994, pp. 169-180.

藤根久・今村美智子、「住居跡・土坑墓出土土器の胎土材料」『深橋前遺跡』第2分冊、岐阜県文化財保護センター、2003年、34～51頁。

藤田英博・高木宏和、「美濃地域」、『弥生土器の様式と編年』東海編、加納俊介・石黒立人編、2002年、151～241頁。

岐阜県文化財保護センター、『砂行遺跡』、成瀬正勝編、2000年a。

——、『野笹遺跡1』、千藤克彦編、2000年b。

——、『深橋前遺跡』、松岡千年・安田正枝編、2003年。

稲賀繁美、「日本の美学その陥穽と可能性と—触覚的造形思想（史）的反省にむけて

—」、『思想』1009、2008年、29～62頁。

石黒立人・宮腰健司、「伊勢湾周辺地域における弥生土器編年の概要と課題」、『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』、伊藤秋男先生古希記念考古学論文集刊行会、2007年、129～189頁。

兼康保明、「近江地域」、『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』、寺沢薫・森岡秀人編、木耳社、1990年、321～419頁。

小林康夫、「表象の舞台（Ⅰ）—古典主義とバロック」、『新訂表象文化研究 芸術表象の文化学』、渡辺保・小林康夫・石田英敬編著、財団法人放送大学教育振興会、2006年、9～24頁。

Lewis-Williams, David, *The mind in the cave: Consciousness and the origins of art*, Thames & Hudson, 2004.

Lewis-Williams, David, and Dowson, T. A., "The sign of all times: Entoptic phenomena in upper Paleolithic art," *Current Anthropology* 29, 1988, pp. 201-245.

松浦寿輝、『表象と倒錯—エティエンヌ・ジュール・マレー』、筑摩書房、2001年。

恩田知美、「美濃地方における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器様相」、『美濃の考古学』第7号、2004年、1～30頁。

佐原真、「出雲石倉銅鐸と銅鐸の絵」、『佐原真の仕事2 道具の考古学』、金関恕・春成秀爾編、岩波書店、2005年、71～117頁。

Siegel, Ronald K., "Hallucinations," *Scientific American* 237, 1977, pp. 132-140.

矢作健二・赤塚次郎、「八王子古宮式と近江湖南甕」、『研究紀要』第四号、（財）愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター、2003年、34～44頁。

吉田正人、「まとも」、『川合遺跡群』本文編、可児市教育委員会、1994年、228～230頁。

【挿図引用文献】

写真・図2・図7…岐阜県文化財保護センター2003

図3…兼安1990

図4…岐阜県文化財保護センター2000a・2000b・2003

図5…Lewis-Williams and Dowson 1988をもとに筆者作成

栗栖プロジェクト

―栗栖地区における文化遺産普及活動―

NPO法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
大塚 友恵



1. はじめに

NPO法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク（以下ニワ里ねつと）は、文化遺産を活かしたまちづくりを目的に、文化遺産の普及活動を行う団体である。地域に眠る文化遺産を見出し、その魅力を人々に伝えていくことで、地域の歴史を後世へと残し、よりよい地域社会をつくり上げていく一助となることを目指している。

ニワ里ねつとでは、平成23年度から平成26年度にかけて、犬山市立栗栖小学校の歴史教育活動を基盤とした普及活動「栗栖プロジェクト」を実施してきた。

本稿は、その活動報告と、プロジェクトの課題と展望についてまとめたものである。

2. 栗栖地区について

栗栖地区は犬山市の最北端に位置し、木曽川と、東部から南部域に広がる山地に隔てられた集落である。世帯数が少なく、地区内に1校のみ開校する栗栖小学校は、全校児童18名（平成26年度現在）と小規模校である。小規模校がゆえに、住民が学校行事に参加するなど地域と学校に密接な関係が築かれている。

栗栖地区には縄文時代中期の「尾崎遺跡」や中世の「瀬ノ上遺跡」といった遺跡、木曽川の渡船場であった「栗栖の渡し」など様々な文化遺産が存在する。

このような文化遺産があり、地域の教育活動が積極的に行われる栗栖地区は、文化遺産の普及活動が組みやすい環境であるため、本プロジェクトを実施するに至っている。

以下にプロジェクトの活動報告を行う。

3. 栗栖プロジェクト活動報告

先述したように、栗栖地区には「尾崎遺跡」、「瀬ノ上遺跡」といった遺跡が埋蔵文化財包蔵地として登録されている。現在も遺跡周辺では遺物を採集することができ、市内でも数少ない「遺跡」の存在が感じられるエリアである。しかし、地域住民の認知度は低く、その存在があまり知られていないのが現状である。そこで、栗栖プロジェクトでは、まずはこれらの遺跡を取り上げ、ワークショップや調査活動などを通して遺跡の周知を目指した。

活動としては、栗栖小学校での歴史教育活動と、栗栖地区に住む全住民を対象とした普及活動の二つがあり、それぞれに報告する。

（1）栗栖小学校での歴史教育活動

栗栖小学校での歴史教育活動では、小学校の全面的な協力のもと、授業時間を利用して全校児童を対象にした体験型のプログラムを実施した。

1）分布調査の実施

栗栖小学校の児童らとともに、栗栖地区内の分布調査を実施した。

分布調査は、地域の歴史を埋蔵文化財の視点から探るものである。これまでに登録されている遺跡は、縄文時代中期の「尾崎遺跡」や中世の「瀬ノ上遺跡」などが挙げられるものの、弥生時代や古墳時代、古代の遺跡に結び付く遺跡は未だ確認されていない。分布調査により、新たな遺跡を発見することは、空白期の様相を解明する上で重要な手掛かりとなる。栗栖地区において、詳細な分布調査が行われた例はなく、栗栖プロジェクトにおける調査は今後の基礎資料となるとともに、調査を通じて栗栖地区の遺跡の存在を実感してもらうことにつながると考える。

分布調査では、学校周辺の畑地を、児童らとともに歩いて遺物の採集を行った。その際、調査場所を確認するために、ひらがなと数字を使って区割した地図と航空写真を用いた（図1）。平成23年度より継続的に実施しており、平成26年度は授業内では行わなかったものの、遺物回収ボックスが校内に設置され、児童らが自主的に遺物を採集して分布調査を進めた（写真1）。

2) 縄文時代の生活ワークショップ

「尾崎遺跡」は、市内でも数少ない縄文時代の遺跡であり、栗栖地区だけではなく、犬山市の縄文時代を知る上でも重要な遺跡である。「尾崎遺跡」に対する興味・関心を高め、



写真1 遺物回収ボックス

理解を深めることを目的に、当時の生活を体験するワークショップを平成23年度より実施してきた。これまでのワークショップの実施内容は表1に示した通りである。ここでは、平成26年度に行った「縄文時代の布、アンギンにチャレンジ」の活動経過を報告する。

「縄文時代の布、アンギンにチャレンジ」

平成26年度は、講師に名和奈美氏を招き、縄文時代の布「編布（あんぎん）」を作るワークショップを開催した（写真2）。「編布」は、植物の繊維を利用して編み上げる布で、織布の技術が伝わる弥生時代以前の縄文時代から使用されていた。素材には、カラムシやイラクサ、アカソといったイラクサ科の植物などが用いられていたことが出土遺物から明らかとなっている。今回のワークショップでは編む作業だけではなく、カラムシから繊維を取り出す作業も行った。

■ 第1回 平成26年7月24日

「カラムシ」の表皮を剥いで靱皮（じんぴ）繊維を取り出す「オコキ」作業を行った。「オコキ」作業で使

用する「オコキ台」や「オガネ」などの道具は、民俗事例を参考に製作した。当日は、「編布」についての講義の後、低学年と高学年の児童が2人1組となって作業を行い、授業時間内にカラムシすべてから繊維を取り終えることができた。

■ 第2回 平成26年10月16日

第1回で取り出した繊維で「編布」を編む作業を行った。用いた道具は編み台、コモヅチ（経糸を巻きつける道具）で、考古資料等を参考に事前に製作した。当日のワークショップでは、児童全員が作品として持ち帰れるよう、それぞれが1点ずつ作業を行った。作業内容が単純な「オ

コキ」作業と違い、経糸と緯糸を一定の法則にしたがって編んでいく作業は、低学年の児童には難易度が高く、高学年の児童が手助けしていた。

3) 成果と課題

分布調査においては、児童らが遺物回収ボックスを作り、自主的に遺物を拾ってきてくれていたことから遺跡への関心は高まってきていることが窺える。また、広範囲で遺物が採集できることや、これまで確認されていなかった時期の遺物も採集できることが明らかとなり、普及啓発としてだけでなく、学術調査としても成果を得ることができた。この



▲ 図1 栗栖地区航空写真（一部）
地図上の区分けをひらがなと数字で表記した。この地図を見ながら、分布調査を行った。

◀ 写真2

縄文時代の生活ワークショップの様子



調査成果の詳細については、今後の報告に譲りたい。

ワークショップは、学年を問わず児童らの興味をひくことができるが、一方で作業に終始してしまい、

(2) 地域への普及活動

栗栖小学校での活動を通じて、地域へ情報発信をし、文化遺産の普及活動を行った。

活動の目的を見失ってしまいう可能性もある。そのため、栗栖プロジェクトにおいては、各分野専門の講師を招き、作業に入る前に必ず講義の時間を設け、作業に終始してしまわないように実施した。こうすることで、作業をより有意義なものとし、理解を深めることができた。しかし、学習内容が、高学年向きであり、低学年の児童らにとっては、難しすぎたようであった。作業としては楽しんで行っていたが、内容については「よく分からない」という声もあった。今後は高学年向けのワークシート、低学年向けのワークシートを作るなど、低学年の児童らも学習に結び付けられるよう、工夫をしてきたい。

▼表 「縄文時代の生活ワークショップ」一覧

	日時	内容
1	平成23年7月5日	縄文土器製作ワークショップ
2	平成23年7月13日	
3	平成23年8月31日	
4	平成24年1月27日	
5	平成24年7月19日	石器製作ワークショップ
6	平成25年1月25日	
7	平成25年10月4日	ドングリ食ワークショップ
8	平成25年10月17日	
9	平成25年11月5日	
10	平成26年7月24日	編布製作ワークショップ
11	平成26年10月16日	

1) 活動展示(毎年11月)

栗栖プロジェクトの活動について地域への周知を図るために、ワークショップで製作した土器や編布、分布調査の成果パネルを栗栖小学校の学習発表会会場で展示した。

2) 「考古学落語」の上演

平成25年11月23日に、栗栖公民館において、地域住民の方々を対象に「考古学落語」の上演を行った(写真3)。「考古学落語」は、服部哲也(NPO 法人ニワ里ねっと)氏が考

古学を題材に創作した創作落語である。子どもから大人まで楽しむことができる落語を通じて、栗栖に残る縄文時代の歴史について、より多くの方に興味・関心をもっていただくことを目指した。当回は、縄文時代の生活を面白可笑しく取り上げた「縄文さん」という演目を桂九雀氏に演じていただき、専門スタッフが解説を加えた。

3) 分布調査の参加呼びかけ

畑地などの私有地へも立ち入る必要がある分布調査では、地域住民の

写真3 考古学落語の様子



方々の理解が必要不可欠といえる。調査に対する理解を得るために、地域の回覧板などを通じて調査に関する情報を発信し、地域住民の方々にも調査への参加を呼びかけた。活動を通じて、それまであまり周

知されていなかった栗栖地区の遺跡について地域住民の皆様を知っていた機会としたが、まだ一方的な情報発信に留まっており、地域住民の方々とともに取り組む活動には至っていない。

4. 課題と今後の展望

栗栖プロジェクトの課題としては、地域を対象とした活動を活性化させていくことが挙げられる。学校での活動が継続的に実施できている一方で、地域への周知活動は十分に行うことができていないのが現状である。

活発化させていくためには、学校を地域の歴史を学ぶ文化的な中心施設として位置づけ、学校、地域、NPOが連携した活動を展開していくことが必要であると考えている。これまでの活動を通じて、学校の存在は、地域での文化遺産の普及活動において重要な

役割を占めていると改めて感じた。実際に学校での活動を介して、この数年間で地域住民の方々との繋がりがもできており、活動に関心をもって下さる方もわずかではあるが増えている。今後は、歴史教育活動を継続的に行っていく中で、地域住民の皆さんへも参加を積極的に呼びかけ、地域全体を巻き込んだ文化遺産の普及活動を展開していきたいと考えている。学校と地域とが密接に関わっている栗栖地区は、このような三者の連携した活動は取り組みやすい環境であり、実現していくことで地域における文化遺産の普及啓発の一つのモデルケースとしていきたい。

5. おわりに

本プロジェクトは、平成23年度に栗栖小学校在職であった中野金弘先生と、ニワ里ねつと会員の服部哲也氏、瀬瀬茂氏、市澤泰峰氏を中心に活動が開始され、現在に至っている。この間、栗栖小学校の先生方をはじめ、栗栖地区の皆様、講師を引き受けてくださった名古屋市教育委員会の水野裕之氏、尾西市歴史民俗資料

館の久保禎子氏、ニワ里ねつと会員の名和奈美氏といった多くの方々ご支援、ご協力によって活動を継続することができている。皆様に感謝を申し上げるとともに、今後の活動にも更なるご支援・ご鞭撻を頂けると幸いです。また本稿の執筆においては、瀬戸市文化振興財団の青木修氏にご助言を賜った。この場を借りて御礼申し上げます。

コラム

震災遺構を残すということ

NPO法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
服部 哲也

平成23年（2011年）3月11
日午後2時46分地震発生。

宮城県石巻市大川小学校。生徒・先生ともに校庭へ退避。

「下級生には、吐いている子もいて。先生たちはたまって『どうする、どうする』ってなってる」。〈生還児童の証言〉

児童たちを校庭に座らせたまま、時間は過ぎていく。

「早く山に行ったほうがいいんじゃないか。先生、何やってるのかな。先生が言わなきゃ、移動できないしな」。〈生還児童の証言〉

午後3時37分津波到達。

当時学校にいた児童76人と教職員11人のうち、児童72人・教職員10人が死亡・行方不明。

被災した校舎、待機した校庭、安全地帯である裏山。被災した当時の

風景は、今はまだそのまま残ります。

「千年に一度の大災害」、東日本大震災後によく聞いた言葉です。私もそう思っていました。ところが、三陸へ行って知りました。津波被害は何度も何度も繰り返されているのです。明治29年（1896年）明治三陸地震 死者行方不明者21,959人

昭和8年（1933年）昭和三陸地震 死者行方不明者3,064人。

昭和35年（1960年）チリ地震 死者行方不明者142人。

昭和43年（1968年）十勝沖地震（三陸沖北部地震） 死者52人。

平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）死者行方不明者18,475人

実に死者の出た津波被害は明治以



降に限っても5度もあるのです。とくに昭和・明治の両三陸地震の被害は甚大であったこともあり、注意を喚起する「津波記念碑」が随所に建てられ、どの碑文にも「地震のあとには高台に逃げる！」「低い土地に家を建てるな！」「などの文言が当時の被害状況とともに刻まれました。悲劇を忘れず次代へ伝えることを津波碑に託したのです。さらには、高台移転が敢行された村もいくつもありません。悲劇を繰り返さない決意はどの時代の被災直後にもあったのです。

しかし、津波碑はいつか過去の文化財となり、碑文の内容も現在の生活とはかけ離れた「昔話」として多くの人がとからは忘れ去られました。そして、高台へ移転した人々も、生業である漁業に不便なこともあり、月日が経つとともに次々に便利な海辺へ戻りました。そして再び

津波に襲われました。明治も昭和も平成も繰り返してしまつたのです。過去を繰り返す。これは人間の性（さが）なのでしょいか？止めることはできないのでしょうか？現在、平成の津波記念碑がいくつも建てられ、再び高台移転が進められています。過去を繰り返さない保証はありません。

さて、今回の東日本大震災の「悲劇を忘れず次代へ伝える」ことは、18,000人以上の人生が一瞬にして終わってしまったことを伝えることにほかならないでしょう。その多くの人がとが非業の最後をとげた舞台や場所を残そうとする試みが震災遺構の保存です。明治・昭和三陸地震後に残された震災遺構はありませんので、三陸では初めての試みでもあります。

大川小学校も震災遺構として保存が検討されている（決定はしていません）一つですが、大川小学校の場合は奇跡的に生還した生徒・先生の証言から、その悲劇に至る物語の一端を知ることができます。冒頭のシーンです。そして、その悲劇の物



- ▲ 石巻市大川小学校の校舎と校庭。
安全地帯である山が右奥に隣接しています。

- ◀ 震災遺構候補のひとつ、南三陸町の防災対策庁舎
(最期まで防災無線で避難を呼びかけ続けて犠牲になった女性職員の物語ある庁舎です。)



語を知って現地に立ったとき、言い知れないとてつもなく大きな悲しみに圧倒されるのです。

地震発生時、校舎から逃れ、校庭に待機する児童。その中議論する先生達。「山へ逃げよう」といった生徒。そして予想に反した方向から襲い来る津波：それらのシーンが現実に見えている被災校舎やその風景とともに頭の中でオーバーラップして一気に胸に迫り来るのです。遺跡で立ちすくむという経験、涙するという経験を私は初めてしました。同時に、遺跡や文化遺産はこんなにも人の心を動かせる可能性があることも実感しました。

赤の他人の私がこれほどの衝撃を受ける場、大川小学校。「早く壊して更地にしてくれ！」という遺族の方々の心情は察するにあまりありません。しかし、被災した校舎や校庭を震災遺構として残し、さらに学校をとりまく安全地帯の裏山や津波を運んだ北上川をもそのまま残して、未来へ伝えることができれば、「早く山に行ったほうがいいんじゃないか」と呟いた児童の言葉もまた未来へ生き続けると思うのです。

大川小学校は「震災遺構」にとどまることなく「世界遺産」にふさわしいと思います。この大川小学校をはじめとする被災建物のいくつかが、震災遺構としてなんとか残り「悲劇を忘れず次代へ伝える」核となってくれることを信じてやみません。

ある日の青塚昆虫観察日記

NPO法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
奥野絵美・兼松泰弘

本稿では、『青塚昆虫観察日記』と題し、ある夏の1日に青塚古墳史跡公園内で行った昆虫（主に甲虫）観察の結果、見つけることのできた昆虫群を紹介する。学術的な昆虫採取方法を取っておらず、不十分な『観察日記』ではあるが、付近の環境変化と共に刻一刻と変わる青塚周辺の昆虫の記録となれば幸いである。

1. 犬山市の昆虫相について

犬山市に生息する昆虫の種群については、昭和57（1982）年刊行の犬山市史自然編における大竹らの報告や、昭和58（1983）年刊行の桑名による「犬山市の昆虫」の報告がある。これによると、当時犬山市では1,548種の昆虫が認められており、起伏に富んだ犬山の地形に呼応して多種多様な昆虫が存在していることが指摘されている。特に

近現代に急速に進められた開発の対象から逃れ、現在も自然が豊かに保全されている市南域の八曾山周辺の低山地帯や市北端周辺の栗栖地区などでは、昭和以前から累々この地に住み続けていた生物群が今も生育しており、犬山の貴重な自然保全区となっている。

2. 青塚古墳の「65の森」

青塚古墳史跡公園内の敷地面積約20km²の多くは、人工芝が植えられた広場に占められている。公園周辺には、主に水田や畠など緑豊かな人里環境が広がっている。公園南東部には、ガイダンス施設の横から北東の方向に65（ろくごう）の森が長さ約120m、幅約10mの規模で展開しており、年間を通じて多くの昆虫が生息する場所になっている（写真1）。

公園内の樹木に関してみると、公園北部から西部にかけての高木については、1996（平成8）年～1999（平成11）年にかけて行われた史跡整備の際に植栽されたものが多いと思われる。しかし、65の森に関しては、一部は当時期の植栽であるが、整備前に撮影された航空写真の状況から観察すると、大多数の樹木は整備以前から存在しているものと考えられる。また65の森は、公園の日常管理に伴って刈り取られた草本類の「捨て場」となっており、腐食が進んだ草木は優良な腐葉土となり、カブトムシ等の幼虫にとって良好な生息場所となっている。

3. 青塚古墳の昆虫日記

昆虫観察を行ったのは、平成26年7月30日午前である。65の森にて、主に樹木上に認められる昆虫の目視による観察を行い、見つけた昆虫の種類について記載し

写真1 「65の森」 景観（北西から）



ていった。（写真2、写真3）観察の結果、6目にわたり2科9種の昆虫が見つかった（表1）。以下、見つかった昆虫のうち、主要なものについて各目ごとに記す。

1. 鞘翅目（甲虫目）

見つかった甲虫類のうち、主に認められたのはコガネムシ科の食植性昆虫であった(写真2・3)。観察による「印象」にすぎないが、アオドウガネが突出して多く、次にカナブン、続いてハナムグリが多い。近年、かつては多く見られたヒメコガネやドウガネブイブイなどの食葉性のコガネムシ科(森2010)に代わって、アオドウガネが数を増していることが指摘されている(三

木2013)が、犬山市においても、1982(昭和57)年の『犬山市史 自然編』では、ヒメコガネが、市内の栗栖や今井・官林や八曾など多くの地区で見つかっている一方、当時の調査ではアオドウガネが記載されていないところから考えると、この犬山でも同様の変化が起こっている可能性も伺える。また、他の甲虫類については、カブトムシ、コククワガタ、ノコギリクワガ



写真2
見つかった昆虫たち(1)



写真3
見つかった昆虫たち(2)

タ、ヒラタクワガタが認められた。

2. トンボ目

トンボ類については、昔から犬山でよく見られるシオカラトンボとハゲロトンボが認められた。史跡公園周辺には、公園北西部に通称「ガマガマの池」と呼ばれる修繕池(写真4)、公園西側には新木津用水、北側には中下川が走っているなど付近に水場が多くトンボの仲間にとつて恵まれた生息場所となっている。この修繕池は、公園整備時に湧き水が集まる水の溜まり場を利用して設置されたものであり、池内に多くのガマガが植生されている。

3. 半翅目

観察時期が夏季であったこともあり、セミ科の昆虫が多く見られた。平野部を生息域とするクマゼミが最も多く、続いてアブラゼミも見られる。また、抜け殻のみの確認であるが、ニイニゼミも確認できた。

4. その他昆虫類

その他、公園内の地上部にはアミメアリを中心としたアリの仲間、樹木や草花の周辺にはジャノメチョウ、シジミチョウ、ゴマダラチョウなどのチョウ類、また、ショウジョウバ

エの仲間やアブの仲間が確認できた。

4. まとめ

青塚古墳周辺で、アオドウガネなど人里周辺に生息する昆虫を観察できた。現在でも、古墳周辺は犬山市域の中では以前として自然が豊かな場所である。しかし、史跡公園整備以前は、古墳北部を流れる中下川でウナギなどの多くの水生生物が生息していたという地域住民の証言から考えると、刻一刻とその生態系は変化を遂げているようである。今後、「文化遺産」としてだけではなく、豊かな「自然遺産」を守る場所としても、青塚古墳史跡公園周辺で詳細な調査および自然保護活動を進めていきたいと思う。なお、本年度はその第一弾として、ガマガの池内でビオトープを設置する予定である。今後、多くの方に活動のご協力を頂けると幸いである。

写真4 「ガマガマの池」 景観（東から）



表1 青塚古墳史跡公園内「65の森」で観察できた昆虫群（H26.7.32）

目	科	種
トンボ目(Odonate)	カワトンボ科(Calopterygidae)	ハグロトンボ(<i>Calopteryx atrata</i> Selys)
	トンボ科(Libelluridae)	シオカラトンボ (<i>Orthetrum albistylum speciosum</i>)
半翅目(Hemiptera)	セミ科(Cicadidae)	クマゼミ (<i>Cryptotympana japonensis</i> Kato)
		ミンミンゼミ (<i>Oncotympana maculaticollis</i> Motschulsky)
鱗翅目(Lepidoptera)	タテハチョウ科(Nymphalidae)	ゴマダラチョウ (<i>Hestina persimilis japonica</i>)
	ジャノメチョウ科(Satyridae)	ジャノメチョウ (<i>Satyrus dryas Scop. Bipunctatus</i> Mats)
	シジミチョウ科(Lycaenidae)	—
双翅目(Diptera)	アブ科(tabanidae)	—
	ショウジョウバエ科(Drosophilidae)	—
膜翅目(Formicidae)	アリ科(Fprmidae)	アミメアリ (<i>Pristomyrmex pungens</i> Mayr)
鞘翅目(Coleoptera)	クワガタムシ科(Lucanidae)	ノコギリクワガタ(<i>Protopocoilus inclinatus</i> Motschulsky)
		コクワガタ (<i>Macrodocas rectus</i> Motschulsky)
		ヒラタクワガタ(<i>Dorcus tianus platymelus</i> Boisduval)
	コガネムシ科(Scarabaeidae)	アオドウガネ(<i>Anomala albopilosa</i> Hope)
		カブトムシ
		(<i>Trypoxylus dichotomus septentrionalis</i> Kono in Y.Kurosawa.1985)
		カナブン(<i>Rhomborrhina japonica</i> Hope)
		シロテンハナムグリ (<i>Protaetia orientalis submarumorea</i>)
		ハナムグリ(<i>Eucetonia pilifera</i> Motschulsky)

引用・参考文献

犬山市教育委員会、2002、史跡青塚古墳整備報告書、犬山市教育委員会。

大竹 勝、1982、6 昆虫類、犬山市史資料編二自然、犬山市。

桑野 修、1983、犬山市の昆虫、犬山市。

三木 進、2013、明石市西部におけるヤマトアオドウガネの現状、きべりはむし35(2)、p.14-15、兵庫昆虫同好会・NPO法人こどもとむしの会。

酒井 香・藤岡昌介、2007、日本産コガネムシ上科図説、第2巻食葉群、六本脚。

古川晴男・長谷川仁・奥村禎一、1965、原色昆虫百科図鑑、集英社。

森 勇一、2003、第3節 愛知の昆虫、愛知県史別編自然、p.208-237、愛知県。

NPO 法人
にわ
古代瀬波の里・
文化遺産ネットワーク
(ニワ里ねっと)

〈猪ノ子町事務所〉
〒484-0084
愛知県犬山市犬山南古券288-7

〈青塚古墳史跡公園〉
〒484-0945
愛知県犬山市字青塚22-3
Tel・Fax 0568-68-2272

〈木之下城伝承館・堀部邸〉
〒484-0084
愛知県犬山市犬山南古券272

HP 《ニワ里ねっと》
<http://niwasato.net>
《木之下城伝承館・堀部邸》
<http://horibetei.net>
f <http://www.facebook.com/niwasatonet>
t <http://twitter.com/#!/niwasatonet>

研究紀要 第2号

niwa

瀬波



編集・発行

NPO法人古代瀬波の里・
文化遺産ネットワーク
(ニワ里ねっと)

写真協力
中野耕司

協力
ナカシャクリエイテブ株式会社

発行日

平成27年5月24日

※本書の内容、テキスト、画像の無断転載、無断転用を禁止します。

ニワ里ねっと会員募集

ニワ里ねっとでは、会員・賛助会員を募集しています。
私たちと一緒に文化遺産を活かしたまちづくりに参加しませんか？

会費

正会員 一口 3,000 円
賛助会員 一口 3,000 円 (個人・団体とも)

会員特典

1. 会員証の発行。会員証の「参加印」を集めると、記念品を贈呈。
2. 会報「さとの四季だより」を年6回お届け。
3. 各種イベントに会員料金で参加。

申込方法

- 方法1. 青塚古墳ガイダンス施設の窓口にて受付。
方法2. 下記郵便振替口座へお振込み。

通信欄に、「年会費」とご記入ください。新会員様は、「新規正会員」または、「新規賛助会員」と明記の上、住所・氏名等を必ずご記入お願いいたします。(※申し訳ありませんが、手数料はご負担願います。)

郵便振替口座

口座番号 00850-9-198552
口座名称(漢字) 特定非営利活動法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
口座名称(カナ) トクヒ コダイニワノサト プンカイサンネットワーク

上記の郵便振替口座にて「寄付金」も受付けております。
ニワ里ねっとの活動の応援、よろしくお願いいたします。



あなたも
ニワ里ねっとに
参加しませんか？

個性豊かな
メンバー活躍中！

